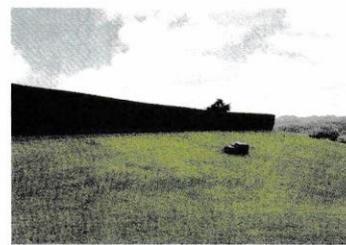


Asian 通信 アジアへ Art Report

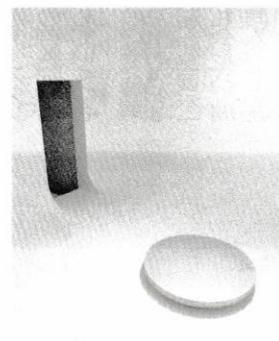
45 南條史生

コロナの時代

もしコロナウイルスに限らず、常に新しいウイルスの脅威に晒されていくのが未来だとすると、展覧会のビジネスモデルは、これまでのような大量動員を前提としたブロックバスター型展覧会は、やりにくくなるだろう。それは量を追求することができないことを意味している。となると、展覧会は質を追求することが大事になるのではないかと、



ギブスファームの自然の中に置かれたリチャード・セラの大作



空蓮房の極めてパーソナルな鑑賞空間
(作家・向山喜章)

ことではあるが、その必然性・重要性が増すだろう。ニューヨークにあるギブスファームはその良い事例である。極めてパーソナルな空間で、一人または少数人数による限定された作品の鑑賞体験が重要になるかもしれない。これは感前の空蓮房の展覧会などが良い例だ。

いろいろなところで、新型コロナウイルスによる変化が論じられている。アートについても例外ではない。いくつものオンライン対談等で、ポストコロナ、ウィズコロナ、ニューノーマルというキーワードが飛び交っている。

しかしこの議論は、展覧会、美術館、鑑賞態度としてアートそのものという項目に分けて論じなければならぬだろう。

では質とは何か。ゆっくり鑑賞する。解説を聞きながら鑑賞する。何回も鑑賞する。観賞後にそれについて話すことを楽しむ、などが考えられるが、ここはもっと新しいアイデアがでてもおかしくない。ビジネスモデルとしてみたときには、入場券単価を高くする、それがやりたくなければ今までより多くの資金援助を獲得する。そうでないればよりの低い経費でできる展覧会を企画する(と)なる。国際的な企画は数が減るだろう。より多くの官・民の補助金、支援金などが必要になる。

一方、デジタル技術による鑑賞など、今まで以上に多様な情報発信が考えられる。私も、森美術館で開催した「未来と芸術展」(2019年11月19日から2020年3月29日)が、2月には新型コロナウイルス問題で閉鎖されたのを受けて、ネット上で会場を歩き回れる3D空間で表現し、多くの人がその内容を見て歩けるようにした。しかしこのような方法はあくまでもリアルな体験とは違う。では、他にどんな解決方法があるのかということもこれから問題となるだろう。